# 伶佳の日々

FMAX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伶佳の日々

【Ｎコード】
Ｎ９８０７Ｔ

【作者名】
ＦＭＡＸ

【あらすじ】
地球の終末が残り３日の世界。意外にも人類の大半は焦らずに最後の時間を愛する者たちと過ごしていた。
そしてスーパー教師が何故かラファエル学園に赴任してきたのだ！！
爽快！　ドタバタ学園アクションコメディー

**（前書き）**

ＦＭＡＸといいます。

よければ長編のファイナルハンターの方も見てください。

「ふっふっふ…ついにこの時が来たわ…」
教員免許をもちながら、私、鈴木伶佳は笑った。

「これで私はラファエル学園の支配者となるのよ！」

そう、私は鬼。学校にいる人間なんか目じゃないわ…。今この時のためにどれだけの苦労をしたか！だがそんな惨めな日々ももうすぐ終わる！私はラファエル学園の門を潜った。

「しっかし無駄に広いわね～。」

ラファエル学園の校内は普通の高校の四倍はある。

「あ、最初はここね。」

その広い校内からやっとのことで私は自分の教室を見つけた。私ははやる気持ちを押さえながらドアを開いた。

「はい、皆さん授業を始めますよ～！」

精一杯教師っぽく挨拶をする。生徒達が自分の席に座りに行った。私は教壇の上に立ち、自分の名前を言った。

「これから社会を担当します、教師の鈴木伶佳です！よろしくお願いします！」

私は生徒を見渡した。何か…魔力を感じるんだけど…って吸血鬼じ

ゃない！超強い妖怪の一種よ…話に聞いてないわこんなの…、いや、待て、落ち着くのよ伶佳！私も鬼じゃない…吸血鬼の一人くらい楽勝よ…多分。

「では授業を始めます！教科書の三十六ページを開いて！」

私は授業を始めた。何事もなく授業が進む

。あ、これは皆にやらせなきゃ駄目ね。よし！

「はい、皆さん今からこのページについてのレポートを書いて下さい！」

この間に生徒をチェックしましょう…吸血鬼以外に何かいるかもしれない…。良く見ると、さっきの吸血鬼以外にも魔力を出してるのがいるみたい…本当にどうなってんだろこの学校…。そうしてぼーっとしながら教室を歩き回っていると、手に何か当たったような感触を覚えた。私が振り向くと、そこには眼鏡が落ちている。すぐに持ち主らしき生徒が拾ったがどうもその生徒の様子がおかしい。一応謝っておこう…

「あ、ごめ…」

「おい、てめえ、俺のマーガレットになにしやがる…」

「え？」

いや、確かに眼鏡は落としたけどマーガレットって…？

「俺のマーガレットに傷をつけやがって！スペルカード、ストーンホーミング！」

そう生徒が言った瞬間石つぶてが私に向かって飛んで来る。

「え、ちょ、何これええ！？」

これが噂の不良！？私は何も考えずに教室を飛び出した。～教室～

ケネス「やっちまったな…」

レイア「京介がああなったら私達でもなけりゃ手がつけられないわよ…」

エレノア「あの先生も可哀相に…」

～廊下～

「はあ…はあ…」

「待ちやがれ！スペルカード、グランドウェーブ！」

「ひいいいぃ！ごめんなさーい！！」

ちょっと、こんな化け物がいるなんて聞いてないんてすけど！とりあえず反撃しなきゃ…

「教師を舐めないでよ！スペルカード、鬼火！」

私の手の平から火玉が打ちされる。これなら…

「スペルカード！レンズリフレクト！死ねえ！」

…火の玉が跳ね返ったぁ！？何なのよー！！～一組教室～

ロード「外が騒がしいわね…」

ロア「そうですね…」

アルベン「あ、京介…」

ロア「何か様子がおかしいですね…」

アルベン「…誰かマーガレットをいじったな…命知らずな…」

ロード「どうでもいいけど静かにならないかしら？」

ロア「しばらくは無理そうですね…」

アルベン「だな、俺は二度とあれを止めたくない。」

～廊下～

「もう…駄目…。」

私の人生…ここで終わりなのかしら…もう無理だと私は立ち止まった。

「な、急に止まるなあ！」

「へ？」

私がそういう間もなく、生徒は私とぶつかってお互いに吹っ飛んでしまった。

「あ、ごめん！大丈夫？」

私がさっきまでのことを忘れ生徒に声をかけた。

「うう…あれ？先生？なんでこんな所に？」

そこには優しそうな男の子が一人座っているだけだった。

「私、助かったの…良かった…」

私はペタンとその場に座りこんでしまった。これから私は真面目に教師をするようになったのは、また別の話である。

「はあ…最近…なんだかやる気を失ってきたわね…」

昼休みの職員室、そこに私、鈴木伶佳の机がある…

「本当は今頃学園支配してウハウハしてるはずなのにね…」

私は本来教師を真面目にする気など全くなかった、私は学園を支配するために教師になったのだ。力はあるはずだった…私は鬼…普通の人間など木っ端微塵にできる妖怪…だけど…

「あの石渡って生徒…恐ろしいくらいに強かったわね…」

そう、私はある不幸な事故に合い（前回の小説参照）、学園を支配する所かまともに教師をせざるを得ない…という状況だった…。

「ま、まあすぐ私みたいな先生、やめさせられるからいいんだけど…はあ…」

なぜだか空しくなる、自分でも理由はわからないけれど…そんなことを考えていると、職員室の扉から一人の女生徒が顔を出した、どうも私に用があるらしい…

「どうぞー」

何処の教師でも言うような決まりきった台詞を言う。女生徒はおずおずと私の前に歩いて来た…手には問題集が握られている。

「質問？」

「あ…はい」

予想は当たったようだ。今まで考えていた事を振り払い、笑顔で生徒に接する。でも心なしか女生徒はおびえているのか、緊張した様子だった。

（そりゃそうよね…私授業しかしていないもの…）

ただ授業をし、質問が来たら答える。ただそれだけ、コミュニケーションもあったものじゃない。質問が終わった時、私は女生徒に聞いてみた。

「…私って怖い？」

「え…？」

「いや…緊張してるようだから…大丈夫、私みたいな教師、校長がクビにしてくれるから」

そう、私は偽物の教師、生徒に好かれるわけがない…

「そんなこと、ないですよ？皆授業分かりやすいって言うし…」

「…お世辞なんていいのよ？」

「本当ですよ？後女子の皆がカッコいいよね、とか可愛いよねって…」

「え…まさか」

「男子が綺麗だとか告白しようかなとか、皆結構先生の事が好きなんですよ？」

ーキーンコーンカーンコーン…

「あ、失礼しました！」

「あ、ちょっと！？」

女生徒はあっという間に行ってしまった。綺麗、カッコいい？私が？有り得ない話にも程がある…そりゃ間抜けとかドジとかは散々言われたけど…

「まあ…気にしない方がいいわね」
私は女生徒の言葉を忘れる事にした。
〜八時間後〜
「お疲れ様でしたー」
「はーい」
私は仕事を終え帰宅しようとしていた。
「さすがにこの時間になると人いないわね…」
そう思いつつ歩いていると、少し先に一つの人影を見つけた。
「翔雅…なの？」
それは私の良く知る人物だった。天宮翔雅…鬼の中でも有数の実力を持つエリート…
「やっと来たか…安心しな、何もしねえよ」
「何か用なの？翔雅」
「お前、ラファエル学園とかいう所の教師をやってるんだって？」
「…そうだけど」
「俺の仲間に入らないか？」

「…なぜエリートである翔雅が直々に私を指名するのかしら？」

「話は簡単、ラファエル学園を潰すのさ」

「……」

「あそこの敷地はでかい、しかも吸血鬼やらなにやら強い奴も名だたる面々が揃っている…ここを占拠すれば俺達鬼の将来は安泰なんだが…いかんせん敵も敵だ…いくら俺だといってもキツい、だから伶佳…お前には強い奴等をここにおびき寄せる仕事をやってもらいたい…勿論、タダでさせる程俺も馬鹿じゃない…協力さえすればそれなりの地位を約束しようじゃないか？」

「……」

「悪い話ではないと思うが？普通の鬼であるお前が大出世だ」

「すぐには決められないわ…」

「…いいだろう、明日答えを聞こう…いい返事を待っている」

翔雅が去った後、私は嬉しいとも怖いともいえない感情に襲われた。

「…これってチャンスよね…」

翔雅はそれなりの地位を約束した。鬼が自分の言った約束を破ることは滅多にない、これが成功すれば私はラファエル学園の支配者とも言える存在になれる。そう、当初の私の目的だ。

「嬉しいのに…嬉しいはずなのに…何でこんなに…」

嫌な気持ちになるのだろう。自分でも良く分からないが、胸が少しずつ締め付けられるような…

「考えないようにしよう…もう答えは決まってるのだから…」

私は妖怪、本来人間とは相容れない種族…

「話を飲もう…」

そう、これは当たり前の選択…妖怪として…鬼として…そう思いながら私は帰路についた。

〜次の日〜

「…朝…？」

どうも寝た気がしない、昨日悩みすぎたのだろうか。

「…学校に行かないと…」

このままだと遅刻してしまう、私は急いで学校に向かった。

「お早う御座います」

「あ…お早う」

生徒が私に会釈をし、セカセカと通り過ぎて行く。何ら変わりもないいつもの朝だ。いつものように職員室に行き、自分の荷物を出す。

「…授業始まっちゃう…」

そう…今日が最後なんだから…偽物の教師を演じよう。授業や職員室での作業をやっていると、あっという間に昼休みになってしまった。そして昼休みになると…

「何か飲みたいわね…」

何故か理由をつけて外に出たくなる。廊下に出る私の手には家で作った弁当が握られていた。

「そういや学校の中をこう歩くのは初めてね…」

「あ、先生！」

女生徒に声をかけられた。昨日質問に来ていた女生徒だ。

「ああ…貴女ね」

「昨日はすいません…」

「いいのよ…」

女生徒はすまなさそうに私に頭を下げた。

「おーい、遅いぞ～？って伶佳先生じゃん、珍しい」

「あ、いま行く…」

生徒がゾロゾロと女生徒に群がっていった。皆で昼ご飯を食べるら

しい。邪魔しちゃ悪いわね…私はコッソリとその場を去ろうとした。しかし…

「先生、一緒に昼ご飯食べません？」

女生徒がとんでもないことを言い出した。

「いいね～先生行こうよ」

「え…いや…私がいたら迷惑…」

「んじゃレッツゴー！」

私は生徒達と昼ご飯を食べる事になった。まあ若い高校生のこと…食事中には…

「先生って彼氏いるの～？」

「い、いないけど…？」

「何！？ならこの俺が先生のナイトに…」

「お前には無理だよ」

何かと色々な話をする物である。

少し驚きもしたが、とてつもなく幸せな一時だった。ラファエル学園を滅ぼすという決心が鈍るくらいに…

「じゃあ…先生また」

「ええ、また…」

「あの…これ…クッキーです…良かったら…」

「え！？」

「じゃ、じゃあ…」

女生徒は走りさってしまった。

「…何よ…かまわないでよ」

やっと…決心したのに…そう決めたはずなのに…女生徒からもらったクッキーを一つ口に入れた。ほんのりと甘い味がした。前の事をすまなく思っていたのだろう…教師としては喜ぶべきことなのに…それなのに…

「…っひく…っく…」

涙が溢れてくるのだ。どうしようもないくらいに。一つ、また一つクッキーを口に含む度に生徒の笑顔が頭に浮かぶ。

「何で…何でそんなに優しいのよ…」

何も出来ていないはずの自分を生徒達は快く認めてくれて…私に接する時は皆嬉しそうな顔で…

「何…何やってんだろ…私」

私…私の馬鹿…こんな良い子達を見捨てて自分だけ幸せになる…今考えれば反吐が出る程卑怯で…嫌らしくて…

「まだ…まだ間に合うかな…」
私は教師としてやっていけるか…でも、今は…
「そんな事を考えている場合じゃない！」
私は走り出した、自分のためにではなく…この学校にいる全ての生徒のために…。

「…来たか…さあ答えを聞こう…といっても答えは決まってるだろうがな」
翔雅が高圧的な態度で私に語りかける。
「えぇ、決まってるわ…」
「ほう…それなら…」
「答えはＮＯ、よ」
「な！？」
「ほら、私にも大事な物が見つかったの、それだけよ」
そう言いながら私は翔雅から離れていく。
「ふざけんなよこのクソ女ぁ！」

ーシャッ…ー

やっぱただでは済まされないみたいね…その証拠に私の背中には生々しい傷跡ができていた。

「お前みたいな奴にわざわざ声かけてやったのによぉー…断ります？ふざけんじゃねえええ！」

「…ふーん…まだまともかと思ったけど結局喋り方はチンピラね」

「んだとゴラァ！」

翔雅が右腕を私に振ってくる。正直…本当は逃げ出したいぐらい怖い…だけど…

「はあああぁ！」

ードンッ！ー

鈍い音と共に翔雅の体が飛んで行く。

「私の生徒を…あんたみたいな奴に…あんたみたいな奴に…好きにさせるものですか！」

そう…あんな素晴らしい教え子達を…傷つけさせるわけにはいかない…たとえ…私の命が散ろうとも…

「このクソ女…許さねえ…スペルカード！ヘレイスラッシュ！」

翔雅がそう叫ぶと翔雅の腕が巨大な剣になった。

「くっ…スペルカード！鬼火！」

私の手の平から火玉が飛んで行く…よし！当たった…っえ？

「ふん…歯ごたえのない攻撃だな」

効いて…ない？鬼火は翔雅に当たったはずだった…それなのに…避けないと…私はとっさに後ろに下がった…これなら…　ードスッ！ー

「ひ…ぐ…」

剣が伸び…た？そんな馬鹿な…

「ははっ…大当たりだ」

私の体に今つけられた傷からドクドクと血が出ている。痛い…本当に痛い…多分もう長くもたないわね…一気にカタをつける！

「はあ…強肉…」

素早く翔雅の懐に入り込む…そして…

「弱食！

」一気に叩き込む！

「ぐっ…」

翔雅の体が上に吹き飛ぶ。
…一気に決める！
「最終奥義！百花繚乱！」
刀を手にし、刀に鬼火を宿らせる！
「はあああ！」
ードオン！ー
「やった…の？」
これで…これで…私は…
ードスッー
「…その程度か？弱っちい…」
「翔…雅…？」
しま…った…やられた振り…を…
「手応えねえ～なあ～…オラア！」
「ひ…っぐ…」
もう痛いとかそれ所の問題じゃない、体が動かない…私の視界が段々と地面に近付いていく、そして…私は倒れた。

「安心しな…今すぐ殺したりはしねえよ…ゆっくり…ゆっくり苦しめて殺してやるからよぉ…！」

ードンッ！バンッ！ー

「ひぐっ…あぐっ…」

痛い…痛い痛い痛い痛い痛い…痛みという感覚が私の気を失わせていく、段々…気が…遠くなってきた…今…私は何発殴られたんだろう…

「そろそろ…終わりにしてやるよ…ヘレイスラッシュ！」

…皆…ごめんね…守れなくて…私が生きるのを諦めた…その時だった。

ーキィン！ー

「な…！？」

「僕達の先生に…何か御用かな？」

「だ…誰だ…俺の部下は…」

「こっちは片付けだぜ！」

「こっちもだ！」

「ナイス！炎蒔！刃！」

「そんな…俺の部下が…たった二人に！？」

「さあ…チェックメイトだ…来い！ハンマー！」

…誰…？助けに来てくれた…？その僅かな希望が私の体をつき動かす。

「石渡君！」

「もう大丈夫だ！先生！」

石渡君がそう言うと翔雅を睨み付けた。

「ちくしょう…人間風情が俺を馬鹿にしやがってぇ！」

翔雅が京介に剣となった自分の腕を振るう、そうだ…石渡君はあの伸びる剣のことを知らない…

「石渡君！…あ…の剣は伸び…る…」

最後の力を振り絞って叫ぶ。

「もう遅え！」

あ…危な…　ーキン！ー　え…嘘…

「き…何故効かない！」

「確かにうっとうしいけど…この弾き返す力には勝てないね！こっ

ちの番だ！スペルカード！グランドウェーブ！」
石渡君がそう言うと、地面がまるで波のようになり翔雅に向かって行く。
「な…何だ…ぐうう！」
「まだまだぁ！」
「くっ…」
すごい…あの翔雅を押してる…このままなら勝てるかも…
「ぐっ…」
「うわぁ！」
「刃！炎蒔！」
あの二人の生徒が…翔雅の部下に…
「今だ！」
「なっ…体が動かな…」
石渡君まで…石渡君達は妙な丸薬で体を動かすことができなくなってしまったようだ。
「能力は弾けても…薬の力までは弾けねえようだな…はは…」

翔雅がニヤリと笑いながら言う。駄目…皆が…動きなさいよ…私の体…何倒れてるのよ…情けないじゃない…教師が生徒守れなかったら馬鹿みたいじゃない…動け…動けぇ！

「！？…伶佳か…今更立ってどうするんだ？」

「…いよ…」

「あぁん？」

「私の生徒に…手を出すんじゃないわよ！」

叫ぶと同時に地面をがむしゃらに蹴る。翔雅に向かって…

ードンッ！ー

翔雅が私の体当たりで吹っ飛ぶ。

「はあ…はあ…」

「殺す…殺してやる！」

「はあ…はあああ！！」

「っ！？妖力が急に上がって…」

おかしい…体はボロボロなのに力が沸いてくる。すると私の鬼の角と爪が伸び始めた。…力が…力が私の体に…

「あ…何だ…」

「あああああ！！」

「ひいいい！！」

翔雅が今までの態度が信じられないくらいに怖がっている。でも、手加減はしない。

「び…びびるか…ヘレイスラッシュ！」

「あああああ！」

ーキィンー

ヘレイスラッシュがあっけなく壊れる。そして私の攻撃が吸い込まれるように当たる。

「ぐわあああああ！！！」

ー我流爪技ー伶式突破ー

「た、倒したの…？」

「先生！？」

「石渡君…」

これでー　私は　ー

「すいません、役に立てなくて…」

「全然？カッコ良かったわよ？」

「先生…何で泣いてるんですか？」

ーやっと　ー教師に　ーなれる

「何でもないわ」

「おーい」

「先生ー！」

「炎蒔！刃！」

ふう…やっと終わった…私はそう思い空を見上げた。星が私達を祝福してくれるようだった…　ーいつか本物の教師になろう　ー今は偽物かもしれないけどいつかは本物になれるはず　ーどんな種でもいつか花を咲かす草花のように…　ＦＩＮ…

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9807t/

---

伶佳の日々

2011年10月8日17時45分発行